

(17) 以下の通り訂正いたします。

## P346 共同発表者削除

誤

### 28) ト라우マ体験を乗り越えた長期血液透析患者の思考の特徴

○菊池紀子<sup>1</sup>、野上陸美<sup>2</sup>、四十竹美千代<sup>3</sup>、吉井 忍<sup>1</sup>、野上悦子<sup>1</sup>、辻口喜代隆<sup>4</sup>、藪田 歩<sup>5</sup>  
<sup>1</sup>富山大学附属病院看護部、<sup>2</sup>金城大学看護学部、<sup>3</sup>富山大学大学院医学薬学教育部、<sup>4</sup>医療法人基伸会栗山病院、<sup>5</sup>神奈川県保健福祉大学保健福祉学部

#### 【はじめに】

近年、透析療法を受ける患者の増加と共に、長期に透析を受けている患者も増加し、透析患者の30%を占めている。長期透析患者については様々な合併症の出現、潜在的な不安、抑うつ、定期的な血液透析療法による時間の制約、日常生活動作の制限などの、つらく、重々しい側面から明らかになっており、看護援助においては患者の心の内面の理解が重要な課題となっている。第1報では、長期血液透析患者は次々と前提となる世界観の崩壊を招くというトラウマ体験を乗り越えて成長を遂げていたことを報告した。

#### 【目的】

本研究では、トラウマ体験を乗り越えてきた長期血液透析患者の思考の特徴を明らかにすることを目的とする。

#### 【研究方法】

本研究は質的記述的研究である。研究参加者は、慢性腎不全で血液透析療法を37年継続している60歳代女性1名。血液透析療法を受けながら、大学で非常勤講師として10年前まで働いていた。研究参加者が看護学生を対象に治療経過、医師、看護師との関わりについて記述した手記をデータとした。データ分析にあたり、本人からの承諾を得て実施した。データの分析はAmia Lieblichらが提唱したナラティブ研究の手法の一つ、holistic content analysisを参考にして行った。

#### 【結果と考察】

A氏の手記には、論理的でポジティブな側面が表れていた。A氏は、慢性腎不全と闘いながらも教育者として、また妻としての役割を担ってきた。A氏は、その人生の中で直面してきた苦境の度に、何度も自己と自己のおかれた状況についてとらえなおす必要に迫られ、それらをとらえなおしながら生きてきたと考えられる。また、A氏の手記を通して、いくつものトラウマ体験から成長を引き出した思考の特徴として5つのテーマが浮かび上がってきた。以下、テーマを《 》で示す。《生きる努力を続ける力》は、A氏の人生を通してのテーマとして浮かび上がってきた。A氏は、血液透析療法を受けながら、仕事、家事、日々の生活での工夫など様々なことを続けてきた。《かかわった人々への感謝》《血液透析とセルフケアの意味づけ》《病気に対するとらえ方》《生きがい》は、《生きる努力を続ける力》を支える要素となっていたと考える。慢性疾患患者においては身体部分、身体機能、社会的自己など様々な対象喪失を体験することが報告されている。A氏は、様々な喪失に対するモーニング・ワーク（悲哀の仕事）に取り組むことによって喪失を受容し、上記に示すような思考の特徴が生じていたのではないかと考えられる。

正

### 28) ト라우マ体験を乗り越えた長期血液透析患者の思考の特徴

○菊池紀子<sup>1</sup>、野上陸美<sup>2</sup>、吉井 忍<sup>1</sup>、野上悦子<sup>1</sup>、辻口喜代隆<sup>3</sup>、藪田 歩<sup>4</sup>  
<sup>1</sup>富山大学附属病院看護部、<sup>2</sup>金城大学看護学部、<sup>3</sup>医療法人基伸会栗山病院、<sup>4</sup>神奈川県保健福祉大学保健福祉学部

#### 【はじめに】

近年、透析療法を受ける患者の増加と共に、長期に透析を受けている患者も増加し、透析患者の30%を占めている。長期透析患者については様々な合併症の出現、潜在的な不安、抑うつ、定期的な血液透析療法による時間の制約、日常生活動作の制限などの、つらく、重々しい側面から明らかになっており、看護援助においては患者の心の内面の理解が重要な課題となっている。第1報では、長期血液透析患者は次々と前提となる世界観の崩壊を招くというトラウマ体験を乗り越えて成長を遂げていたことを報告した。

#### 【目的】

本研究では、トラウマ体験を乗り越えてきた長期血液透析患者の思考の特徴を明らかにすることを目的とする。

#### 【研究方法】

本研究は質的記述的研究である。研究参加者は、慢性腎不全で血液透析療法を37年継続している60歳代女性1名。血液透析療法を受けながら、大学で非常勤講師として10年前まで働いていた。研究参加者が看護学生を対象に治療経過、医師、看護師との関わりについて記述した手記をデータとした。データ分析にあたり、本人からの承諾を得て実施した。データの分析はAmia Lieblichらが提唱したナラティブ研究の手法の一つ、holistic content analysisを参考にして行った。

#### 【結果と考察】

A氏の手記には、論理的でポジティブな側面が表れていた。A氏は、慢性腎不全と闘いながらも教育者として、また妻としての役割を担ってきた。A氏は、その人生の中で直面してきた苦境の度に、何度も自己と自己のおかれた状況についてとらえなおす必要に迫られ、それらをとらえなおしながら生きてきたと考えられる。また、A氏の手記を通して、いくつものトラウマ体験から成長を引き出した思考の特徴として5つのテーマが浮かび上がってきた。以下、テーマを《 》で示す。《生きる努力を続ける力》は、A氏の人生を通してのテーマとして浮かび上がってきた。A氏は、血液透析療法を受けながら、仕事、家事、日々の生活での工夫など様々なことを続けてきた。《かかわった人々への感謝》《血液透析とセルフケアの意味づけ》《病気に対するとらえ方》《生きがい》は、《生きる努力を続ける力》を支える要素となっていたと考える。慢性疾患患者においては身体部分、身体機能、社会的自己など様々な対象喪失を体験することが報告されている。A氏は、様々な喪失に対するモーニング・ワーク（悲哀の仕事）に取り組むことによって喪失を受容し、上記に示すような思考の特徴が生じていたのではないかと考えられる。